

令和7年度

ニューライフ

カレッジ霧島

隼人学

要旨集録

期間 令和7年6月～令和8年2月

場所 鹿児島工業高等専門学校

国分公民館

隼人公民館

志学館大学 社会連携センター生涯学習部門

鹿児島工業高等専門学校 地域共同テクノセンター

霧島市教育委員会

テーマ：霧島を知り、未来を描く～歴史とデジタル時代の架け橋～

南九州にはかつて「隼人」と呼ばれる平和で豊かな文化をもった人々が暮らしていたといわれます。私たちの地域には「隼人」やかつてこの地で生活していた人々が残してくれた、多様な自然・社会・産業・文化遺産があります。「隼人学」はそれらの地域遺産を南九州という広い視野と多角的な視点から発掘しつつ学び、地域でより豊かに生きるため、また地域をより豊かに発展させるために生かし、未来に繋いでいこうとする地域「学」です。

令和7年度は、「霧島を知り、未来を描く～歴史とデジタル時代の架け橋～」をテーマに、全8回の講座を開講しました。

日時	講義・学習内容	講師	会場	頁
(第1回)	開講式		国分公民館	P2
6/14 (土) 9:30～11:45	霧島の魅力(食や観光)を丸ごと味わう	霧島市観光PR課 主査 坂元 祐己 氏		
(第2回) 7/12 (土) 9:30～11:30	昔と今、そして未来 ～人口減少とデジタル時代を 生き抜く知恵～	志學館大学 法学部 准教授 白尾 克己 氏	鹿児島工業 高等専門学校	P3 、 P4
(第3回) 9/13 (土) 9:30～11:30	古代文学における「隼人」 ～デジタル時代と文献学～	鹿児島工業高等専門学校 一般教育科 准教授 田中 智樹 氏	鹿児島工業 高等専門学校	P5
(第4回) 10/11 (土) 9:30～11:30	地域の防災意識と災害伝承 ～石碑の利用とデジタル活用～	志學館大学 人間関係学部 教授 宗 建郎 氏	鹿児島工業 高等専門学校	P6
(第5回) 11/8 (土) 9:30～11:30	足元から歴史を照らす ～奄美・与論島の事例から～	鹿児島工業高等専門学校 一般教育科 准教授 町 泰樹 氏	鹿児島工業 高等専門学校	P7
(第6回) 12/13 (土) 9:30～11:30	霧島市の未指定文化財の魅力	NPO 法人かごしま探検の会 代表理事・志學館大学 非常勤講師 東川 隆太郎 氏	国分公民館	P8
(第7回) 1/10 (土) 9:30～11:30	外からみるとよく見えた、 霧島の歴史的潜在力	語楽倶楽部 代表 中堀 清哲 氏	隼人公民館	P9
(第8回) 2/14 (土) 9:30～11:45	南の縄文ストーリー ～あなたがいたから今がある～	元 上野原縄文の森 園長 前迫 亮一 氏	国分公民館	P10
	閉講式			

受講して～受講者アンケートより抜粋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P11～P13

写真で見るニューライフカレッジ霧島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P14～P15

※毎回の要旨については、各講師の原稿の都合上、文字、様式が統一されていないことをあらかじめ御了承ください。

令和7年度ニューライフカレッジ霧島 第1回講座 6月の講義要旨

日時 6月14日(土) 9:45~11:45

講師 霧島市観光PR課 坂元 祐己

演題 市内観光講座～霧島の魅力(食や観光)を丸ごと味わおう～

要旨:

1 霧島市の観光資源について

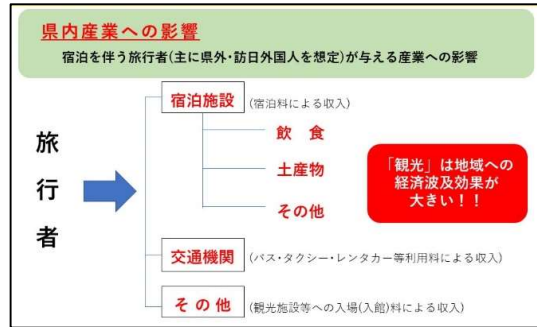
- (1) 霧島市について
- (2) なぜ観光? → 地域経済への影響大
宿泊・飲食・土産物・交通機関など
- (3) 霧島市の観光状況
 - ア 宿泊者数・日帰り客数
 - イ インバウンドの状況
→ 「予言」の影響大
災害等の明確な理由で旅行者が来なくなる場合もあるが、予想できない理由で旅行者が来なくなることもある。
 - ウ 教育旅行・スポーツ合宿
- (4) 霧島市の観光資源
 - ア 霧島市の温泉
4つの温泉郷と多彩な泉質
 - イ 霧島市の特産品
・黒豚・黒牛・黒さつま鶏・茶・焼酎…
 - ウ 霧島市の歴史 } 文化観光
 - エ 霧島市の神社 }
 - オ 霧島市の自然
・観光施設だけではなく、食や文化・自然も大きな観光資源。
・見方を変えると様々なPRポイントあり。
・地元のことも知らないことが多い。

2 観光PR課の取組み

- (1) 霧島市への誘客活動
 - ア ツーリズム EXPO ジャパン(東京都)
 - イ 日本観光ショーケース in 大阪・関西
 - ウ 九州観光素材説明会(東京・大阪)
→九州観光コンテンツ商談会に名称変更
 - エ 教育旅行誘致セールス・九州7県合同修学旅行説明会
 - オ 海外セールス・商談会等
 - カ 地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり
- (2) 関係団体との連携
 - ア 各地区温泉旅館協会
 - イ 霧島市観光協会
- (3) 各種イベント等の主催・共催
 - ア 初午祭
 - イ 龍馬ハネムーンウォーク

★「霧島」実はあまり知られていない?

⇒ 継続して「霧島」の魅力を発信する。
市民の皆さんも市外へ霧島の魅力を発信!



経済への影響 (観光消費額)

観光消費額とは、鹿児島県内において、旅行者が1回の旅行で使用した金額のこと(宿泊、飲食、土産物、レンタカー使用料、入館料、体験料など)
※航空機代など居住地からの移動は含まない

区分	令和元年			令和3年			令和5年			
	県外	県内	合計	県外	県内	合計	県外	県内	合計	
日本人(海外)	147,332	40,905	188,237	82,326	37,471	119,797	135,353	39,495	174,848	
日本人(国内)	17,303	35,417	52,720	9,206	27,669	36,875	14,782	22,128	36,910	
訪日外国人	-	-	44,684	-	-	37	-	-	15,160	
計	-	-	285,641	-	-	約1,289億円減	-	-	156,709	226,918

コロナ禍前R1からR5 → 約587億円減
コロナ禍 R3からR5 → 約702億円増

【出典: 「令和5年鹿児島県の観光の動向」】
※鹿児島県への観光入込客

霧島地区の延べ宿泊者数の動向 市の調査だとやや少なくなる。調査法の違いによる。

区分(1月~12月)	令和元年	令和3年	令和4年	令和5年
県外	935,315人	391,654人	558,580人	732,041人
県内	269,840人	243,908人	250,382人	265,268人
全体	1,231,998人	656,768人	823,290人	1,030,727人

新型コロナウイルスによる外出自粛(R2.4から年間) | 全国旅行支援・全国和牛能力共進会 | かがしま国体かがしま大会

【出典: 「令和5年鹿児島県の観光の動向」】

- 鹿児島県の傾向として、九州地区外(関東地区・関西地区)からの旅行者が増加
- 県内の旅行者はコロナ前に戻りつつあるが、県外はまだ戻りきっていない
- コロナ禍における旅行支援を霧島市独自で行ったことにより一定の効果あり

国籍別外国人延べ宿泊者数 (鹿児島県)

	韓国	香港	台湾	中国	米国	シンガポール	ドイツ	英国	オーストラリア	その他	合計
R5	57,630	44,710	35,020	32,360	17,310	9,780	6,300	5,260	5,140	56,470	269,980
R4	4,430	2,340	1,510	1,850	2,920	1,740	590	480	620	9,860	26,340
前年比(%)	1,200.9	1,810.7	2,219.2	1,649.2	492.8	462.1	967.8	995.8	729.0	472.7	925.0

地区別外国人延べ宿泊者数

	鹿児島	指宿	霧島	北嶺	大嶺	種子島	屋久島	奄美	その他	計
R5	148,448	22,140	45,224	25,855	11,789	1,321	8,315	4,599	2,290	269,980
R4	12,789	1,413	6,234	1,628	913	542	584	1,236	1,002	26,340
前年比(%)	1,060.8	1,466.7	625.5	1,488.0	1,191.4	143.8	1,324.4	272.0	128.6	925.0



令和7年度ニューライフカレッジ霧島 第2回講座 7月の講義要旨

日時 7月12日(土) 9:30~11:30

講師 志學館大学 法学部 准教授 白尾 克己

演題 「昔と今、そして未来」～人口減少とデジタル時代を生き抜く知恵～

1. はじめに

私たちは今、「かつて経験したことのない変化の時代」を生きています。特に大きな問題となっているのが、**生産年齢人口(15~64歳)の急激な減少**です。2020年から2030年のたった10年間で、日本の生産年齢人口は**634万人減少**すると予測されています。これは、九州の鹿児島・宮崎・熊本・大分・佐賀の人口をすべて合わせた数を上回ります。

この現実を念頭に置くと、なぜ社会がここまで急速に変化しているのか、なぜデジタルの力がこれほど求められているのか、その背景が見えてきます。今回の講演では、この「人口減少」という社会の大前提を出発点として、デジタル時代の特性と、その中で私たち一人ひとりがどう生きていけばよいのかを、一緒に考えていきたいと思えます。

2. デジタル時代は止まらない

アナログとデジタルの違いを見てみましょう。アナログは連続的で、人の感覚に近い動きが特徴。一方、デジタルは情報を「0」と「1」で処理し、正確さや劣化のしにくさ、コピーの容易さが強みです。32GBのUSBメモリには、紙にして160トン分もの情報を保存できる一方で、情報漏洩などのリスクもあります。

なぜ、これほどまでに「デジタル化」が進んでいるのか。その理由のひとつが、**人手不足への対応**です。634万人という労働力の減少に対処するため、政府は次の4つの柱を打ち出しました：

- AIやデジタル技術による生産性の向上
- 外国人労働者や多様な人材の活用
- 高齢者の就労促進
- 学び直し(リスキリング)による能力開発

このように、デジタルは「人に代わる存在」ではなく、「人を支える存在=デジタル人手」として不可欠なものになっているのです。**社会の変化を読み解くうえで、この人口減少の現実を常に頭に置くことが重要です。**

3. Society5.0は「超変化の時代」

これまで社会は、過去のデータをもとに未来を予測してきましたが、VUCAと呼ばれる「予測困難な時代」に入り、今では**膨大な現在のデータを即座に分析して意思決定を行う**ことが必要になっています。こうした社会を支えるのがAIであり、それが中心となるのが「Society5.0」です。これは、「サイバー空間と現実空間を高度に融合し、人間中心の社会を目指す」という構想で、経済発展と社会課題の解決を同時に実現する未来像です。ここでも、背景にはやはり**労働力不足の問題**があり、AIが分析・予測を行うことで、それを補うことが期待されています。

技術の進化は加速度的です。1995年以降、インターネット、スマートフォン、SNS、クラウド、AI、キャッシュレスなど、私たちの暮らしは一変しました。今後も、AI医療、自動運転、見守り支援、パーソナルアシスタントなど、高齢者の生活を支える技術がますます広がっていくでしょう。

4. 明日を生きるための知恵と防衛

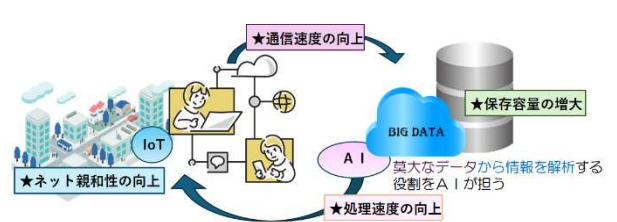
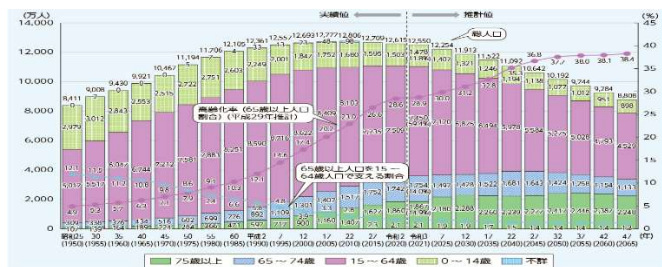
こうした時代において、私たちに求められるのは「完全についていくこと」ではなく、少しずつ慣れていく姿勢です。人や機械に頼ることをためらわず、便利なものはどんどん使っていくことが、生活の質を守ることにつながります。ただし、安心と安全は別物です。便利さの裏にはリスクもあります。仮想世界でも、相手は生身の人間であり、そこには責任が生じます。鹿児島県でも、令和6年度にはサイバー犯罪相談が3669件に上り、その多くが詐欺や悪質商法です。

私たちは、「疑う力」＝批判的吟味を持つことが大切です。そして何か不安なときは、消費者ホットライン、警察、見守りネットワーク、地域包括支援センター、家族や知人など、信頼できるつながりを積極的に使いましょう。

5. まとめ

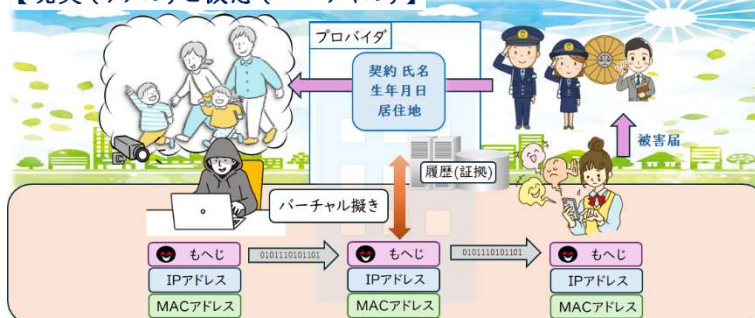
「昔と今、そして未来」を通じて見えてくるのは、人口減少という現実が、社会のあり方そのものを変えているということです。これからの時代は、AIやデジタル技術と上手に付き合っていくことが、生きる知恵となります。

「デジタル」と聞いて構える必要はありません。これは私たちを支える新しい道具であり、自然に、少しずつ使いながら慣れていけば良いのです。恐れず、無理せず、前向きに、変化の波におぼれず、力を抜いて乗りこなす。それが、これからの時代を心豊かに生きる秘訣です。



【Society5.0(超スマート社会)の実現】

【現実(リアル)と仮想(バーチャル)】



【デジタル犯罪から身を守る方法】



令和7年度ニューライフカレッジ霧島 第3回講座 9月の講義要旨

日時 9月13日(土) 9:30~11:30

講師 鹿児島工業高等専門学校 一般教育科 准教授 田中 智樹

演題 古代文学における「隼人」～デジタル時代と文献学～

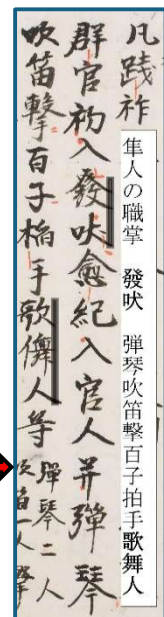
1.本講義の二つの軸

本講義では以下に示すように作品論の観点から『古事記』を読み解くという縦軸と、デジタル技術が文学研究にどれほど寄与しているのかを紹介するという横軸を設定した。

2.文献学的調査とデジタルデータ

「隼人」については既に多くの優れた論考があるが、今回は限定して『古事記』における隼人の姿について考察を進めた。特に似たような物語を記載する『日本書紀』と比較することで『古事記』細部の独自性が鮮明に浮き上がり、その特徴をさらに際立たせることができる。立論の土台・材料として『古事記』下巻、履中天皇条の墨江中王の反乱を取り上げ、主君を裏切る「隼人」曾婆加里に着目した。

まず「隼人」とはどのような民なのかを理解するために、括弧内の各種文献によって以下の点について確認を進めた。奈良時代の隼人の職掌について（『延喜式』、『和漢三才図会』）や後世の隼人の評判（『八幡宇佐宮御託宣集』）、古辞書による「隼」の意味（『説文解字繫伝』、『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』、『和名類聚抄』）、史書における隼人記事（『日本書紀』、『続日本紀』、『類聚国史』）などについて解説した。



またこれらを紙資料にて示すと同時にスライドを使って国立国会図書館や各大学のアーカイブなどデジタルデータの効用を示しながら、各文献の実際の姿に触れながら進めた。

3.『古事記』の隼人像について

史書から『古事記』編纂時点ではまだ大隅、薩摩は日向国から分離しておらず、律令制において不安定、曖昧な存在であったこと。反乱を繰り返しており、征伐対象であると同時に国家成員として教化教育の対象でもあったことなど、マイナスの側面が読み取れた。同時に天皇に近侍することのできた存在であり、律令制下でも洛中の護衛や歌舞を以て仕えている。名義の点からもプラスの要素も看取され、二面性或いは理想と現実に乖離が認められる存在である点を特徴として指摘。文脈からは「近習」でありながら「不義」（『律令』「八虐」の一つ）を犯すが、『古事記』はこれを曾婆加里個人の罪とせず「隼人」の罪としていることを用語の偏りから論じた。

4.デジタル技術の功罪

講義中、努めて実際の写本や版本の姿をデジタル画像で映し出し、その有用性を示そうと試みた。文献を紐解くことが、今やパソコンを起動させることと同義であると言えるくらい、貴重書を閲覧できる環境は整えられている。当講座が掲げる「歴史とデジタル時代の架け橋」として、今回の講義がデジタルデータに触れるきっかけとなれば幸いである。

令和7年度ニューライフカレッジ霧島 第4回講座 10月の講義要旨

日時 10月11日(土) 9:30~11:30

講師 志學館大学 人間関係学部 教授 宗 建郎

演題 地域の防災意識と災害伝承—石碑の利用とデジタル活用—

地図記号というものは、ほとんどの人が小学校や中学校で習った覚えがあるものではないでしょうか。そして大人になってからは改めて学ぶ機会がないものでもあります。そのため子供の頃に習った地図記号から情報がアップデートされていない人が多いと思います。しかし、地図記号も時代とともに変化をしています。そして今最も新しい地図記号として、2019年から使われている「自然災害伝承碑」という地図記号があるのです。

2018年の西日本豪雨（平成30年7月豪雨）は西日本を中心に大きな被害をもたらし、100名を超える犠牲者が出た大きな災害でした。この時、土石流などが発生した地域において、過去の災害で起こったことが石碑に刻まれていたにもかかわらず、その地域の住民からはほとんど意識されておらず、その教訓が生かされませんでした。そこで、各地域の自然災害への意識を高める一助とするために「自然災害伝承碑」という地図記号が地形図に掲載されることになりました。

どのような災害に対して特に警戒しておくべきなのかは地域によって異なります。この時に語られる「地域」とはそのスケールによって異なり、注目される災害も違いがあります。鹿児島県が警戒する災害、霧島市が警戒する災害など、自治体のスケールで語られる災害は、その中に含まれる多様なコミュニティの多くが警戒するべき災害だとしても、すべての危険性を網羅しているわけではないのです。

コミュニティのスケールで警戒するべき過去に起こった災害は、石碑に刻まれた災害伝承という形で地域に残されていることがあります。それは過去にその地域に暮らした先人たちが経験した、そこから得られた知識と教訓を後世に生きる私たちに伝達してくれます。石碑とはいわば場所と結びついたメディアの一種といえます。しかしそのような石碑も、情報を受け取るべき私たちが活用しなければ、過去に得られた教訓を生かすことはできません。また、そのような石碑を管理する人々がいなければ、やがて草に覆われ、その存在すらも忘れ去られてしまうでしょう。

こうした自然災害伝承碑を、現在はインターネットの『地理院地図』（国土地理院）で検索しその内容も見ることができます。また、奈良文化財研究所が配布しているスマートフォンアプリの「ひかり拓本」でデジタルデータ化ができるようになっています。石碑というメディアがデジタルでも活用され始めています。

地理院地図に記された自然災害伝承碑は、まだすべての石碑を網羅したものではありません。地理院地図で石碑をたどったり、掲載されていない身の回りの石碑を探してみたりすることが、地域の防災意識につながることでしょう。

日時 11月8日(土) 9:30~11:30

講師 鹿児島工業高等専門学校 一般教育科 准教授 町 泰樹

演題 足元から歴史を照らす～奄美・与論島の事例から～

1. はじめに

講師の自己紹介を行い、本講演のねらいと講演の流れについて説明した。

講演のねらいは、講師のこれまでの研究内容を共有し、そこから受講生自身が地元のことに気づき、調べ、未来を描くことにつなげてもらうこと。

2. 民俗学ってどんな学問？

民俗学について、その学が生じた世界史的な潮流に触れ、柳田國男以前の民俗学的関心として、本居宣長や菅江真澄、平田篤胤、名越左源太について紹介した。また、柳田國男の生涯や初期の著作にみられる関心領域について触れ、民俗学が扱う領域について紹介した。

上記を踏まえた上で、民俗学の特徴として、私たち自身の行動様式や思考のありようについて考える学問であること、その際、人々の「感情」をも扱える学問であることを説いた。

3. 与論島の話：国の歴史と庶民の歴史（葬制の変容を事例に）

鹿児島県最南端の離島、与論島における葬制の変容を事例に、国の歴史が庶民の歴史にいかに関与しているのかについて検討した。

具体的には、次の3点について論じた。

- ①与論島では神仏混淆的な葬儀が現在でも行われているが、そのような形態になった要因に明治期の廃仏毀釈があったこと。
- ②明治期以前には風葬が行われていたが、それが明治中期以降の伝染病の流行とそれに対応するための衛生政策の導入と警察による取り締まりを経て洗骨を伴う土葬へと変化し、火葬場が設置されるまで行われていたこと。
- ③明治期の廃仏毀釈やその後の近代化のなかで、シニグ祭祀や十五夜踊りといった民俗宗教も抑圧の対象となったが、疫病や災害に対応する形でそれらが復興されたこと。

4. おわりに

本講演で論じた内容についてまとめ、ニューライフカレッジ霧島のテーマ「霧島を知り、未来を描く～歴史とデジタル時代の架け橋～」に立ち返り、私たちが過去からのつながりのなかで生きて（生かされて）いること、地域の歴史を知ることは私たちの現在地を知るために重要で、この作業無くして未来は描けないことに言及した。

令和7年度ニューライフカレッジ霧島 第6回講座 12月の講義要旨

日時 12月13日(土) 9:30~11:30

講師 NPO 法人かごしま探検の会代表理事・志學館大学非常勤講師 東川 隆太郎

演題 霧島市の未指定文化財の魅力について

「未指定文化財」。聞きなれない言葉かもしれませんが。霧島市には数多くの文化財があります。国宝もあれば、国指定の重要文化財や県指定文化財、市指定文化財、さらには登録有形文化財など多様に伝えられてきました。未指定文化財は、それらには含まれないものの、今後指定文化財となりうる価値を有し、また指定されなくとも地域にとって大切な宝といえる文化財のことです。文化庁も、こうした未指定文化財が地域において掘り起こされ、既に指定されている文化財との関連などを地域で調査する取り組みを推進しており、鹿児島県内でも南九州市や薩摩川内市、鹿児島市などが先行して取り組んでいます。

未指定文化財は、文化財にとって重要な目的である「保存」に限らず、これからは「活用」も重要になります。地域にとってはチャンスでもあります。これまで以上に文化財と向き合わないといけないので課題も抱えることになります。また未来を見据えた活動ともいえますが、取り組みを成功させるためには行政だけでなく、地域住民の参画が不可欠になります。そのため、これまでの文化財の概念に囚われない考え方を持つ必要もあります。その1つが「時代」です。古いもの、時を経たものが文化財と思いがちです。しかし例えば昭和という今生きている私たちの記憶の中にある時期のものも、十分に研究や検証の対象となります。よって保存や活用には、関わってきた地域の人々の記憶や記録が大切になります。

霧島市にも、未指定文化財が多様かつ多彩にあると考えています。その中でも特徴的で且つ主な視点として提案したいことが4つあります。

1つは、「温泉文化」です。日本温泉協会などが現在、日本の温泉文化をユネスコ無形文化遺産の登録に提案しようとする動きがあります。霧島市には日本の温泉文化を象徴するような文化財が多数あります。限りある資源である温泉への祈りの場である温泉神社、古くから地域で愛されてきた公衆浴場などです。

2つ目は「鉄道」です。肥薩線や日豊本線が営業している霧島市には鉄道に関する文化財も物語が豊富です。肥薩線は明治36年に現在の隼人駅から吉松駅まで延伸されました。そのため明治期の遺構が現役で活躍しています。市民運動によって活性化や保存が図られた嘉例川駅や、同時期の駅舎のある大隅横川駅はまさにその象徴といえるでしょう。

3つ目は「麓」です。江戸期の霧島市はより細かい行政区に分けられた地域でした。郷と呼ばれ、その中核は武士が集まって居住する麓でした。現在も残る麓集落にサムライ文化を現在に伝える街並みなどがあるのです。国分小学校周辺は国分郷の麓であり、当時の町割りが比較的残されており、武家門もあります。福山麓は港町と共に往時の雰囲気伝えていきます。

最後に、霧島市は霧島ジオパークでもあり、火山と共生する自治体でもあります。加久藤カルデラや始良カルデラの活動の影響を受けており、火砕流や溶岩などによって地域の産業や建築物が成立しています。

これらを見つめなおすと、さらに魅力的な霧島市が浮上するのではと思っています。

令和7年度ニューライフカレッジ霧島 第7回講座 1月の講義要旨

日時 1月10日(土) 9:30~11:30

講師 語楽倶楽部 代表 中堀 清哲

演題 『外からみるとよく見えた、霧島の歴史的潜在力』

1 挫折からの閣外脱出

霧島市牧園町高千穂で生まれ育った背景と歴史好きになった経緯。希望した大学入試には失敗したが、先日亡くなられたフリーアナウンサーの久米宏さんにテレビ番組の中で自分の投書した手紙を読まれた事をきっかけに渡英を決意。

明治以降西洋諸国に追いつけ追い越せでただひたすらに走ってきた日本はこのままでいいのか、やがて来る高齢化社会を見据えて、斜陽の国と言われた英国を見ることは学びが多いのではないかという当時の思いを語る。

2 英国での老人ホームでの経験

1991年春、イギリスの老人ホームでの住み込みでの生活をしながらの体験談を語る。

3 外からよく見えた我が故郷霧島

1992年以降日本語教師になり英国滞在を続け、ヨーロッパ各国を巡りながら日本や霧島の素晴らしさに気付いた事を語る。

4 霧島の魅力の奥深さと潜在能力

1996年帰国し、霧島の素晴らしい一面を多くの皆さんに知っていただく取り組みを紹介。『霧島神宮』『鉄道』『霧島国際音楽祭』などを通じて見方を変えることで霧島の魅力がより深まることを提案。

5 結びに

デジタル社会の今こそ、様々な事を俯瞰して物事をとらえるアナログ的生き方、モノの見方の大切さを語る。

日時 2月14日(土) 9:30~11:30

講師 上野原縄文の森 前園長 前迫 亮一

演題 南の縄文ストーリー ―あなたがいたから今がある―

はじめに

わが国では、土器や弓矢を発明し、狩猟や漁労・植物採集活動などを行ない、自然界にあるものを主たる食糧源として生きていた時代のことを縄文時代と呼んでいる。2021年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されたように、縄文時代の情報は東日本発が多く、縄文時代は「東高西低」と呼ばれることが多い。そのような中、西日本の中でも鹿児島県や宮崎県南部の南九州地域では、極めて安定した「南の縄文文化」が形成されたことで注目されている。その特徴を確認し、その意味や意義について考えてみたい。

1 日本人のルーツ

今日、ほぼ間違いないとされる日本最古の遺跡は、約4万年前のものである。土器が発明される前の旧石器時代のことで、大陸で使用された石器との共通点などが指摘されている。近年、DNA研究の進展はめざましく、発見された旧石器時代の人骨から、今日、日本列島に住む人々は、約3万年前からアジア各地との繋がり・連続性を持っていることが確認されるようになってきた。

2 縄文時代とは

縄文時代は約1万3千年以上もの長い間続いた時代で、名称のもとになった縄文土器の特徴の変化によって、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分されるのが一般的である。

3 「東高西低」の縄文文化

教科書的な縄文時代のイメージの多くは、東日本の情報が中心となっている。2018年の秋、フランスのパリで開催された展示会「縄文―日本における美の誕生」に出展された遺物の約97%が東日本の出土品であったことは、縄文時代・縄文文化が「東高西低」と呼ばれる所以を語るエピソードとなっている。一方、残りの3%の中に上野原遺跡(霧島市国分)の壺形土器2点が含まれていた点は、「南の縄文文化」の特性を際立たせる証の一つとなっている。

4 「南の縄文文化」の流れをたどる

縄文時代の南九州は、草創期の隆帯文土器文化をはじめ、早期前半の筒形土器の流行、早期後半の壺形土器の登場など、早い段階から安定した暮らしの指標である定住生活の痕跡が見られ、その代表選手として上野原遺跡が知られている。

一方では、約7千3百年前の鬼界カルデラ(薩摩硫黄島付近)の大噴火に代表されるように、多くの自然災害に遭遇したのも南九州であった。繰り返される火山活動とそれによる地震や津波などの災害は、甚大な打撃を与えたと考えられるが、そのたびに力強くかつ粘り強く生存し、各地との交流を深めて復興していったのもまた南九州の縄文人たちであった。

5 「南の縄文文化」の基盤となるもの

縄文時代の遺跡は、「日当たりの良い南向きの小高い丘」で発見されることが多い。加えてその近くには、生きるために必須の水場・湧水点がある。そもそも南九州には、その条件に適した地形が存在する。約3万年前に始良カルデラから噴出した入戸火砕流(通称シラス)からなる台地・平坦面である。今日、「痩せた土地」とか「崖崩れ」など、ネガティブな印象の強いシラス台地であるが、南九州の縄文人にとって、最適な生活環境の舞台を提供してくれたことは間違いない。

おわりに

人々それぞれに生きてきた経歴があるように、土地にもそれぞれ履歴がある。遺跡の発掘調査からは、各土地の履歴と共に、そこに生きたその時々の人々の生き様を知ることができる。数万年前から自然災害をはじめとする、多くの困難・障害を乗り越えた人たちがいたからこそ今日の社会があり、私たちが生きているというのは紛れもない事実なのである。

★受講して～受講者アンケートより抜粋～

第1回『霧島の魅力(食や観光)を丸ごと味わう』

- ・霧島市の観光資源の魅力を改めて知れ、とても有意義でした。他県、海外への PR などの取り組みも積極的に行っておられ、頼もしく思いました。県とのタッグは大事ですね。
- ・ニュースでインバウンドはよく聞いていましたが、生活していて目につかず、身近に感じるものがなかったので、霧島市のインバウンドの状況を知れて、気づいてないだけで身近なものだったのだと興味深く聞きました。
- ・コロナ禍で経済に影響があり、地域経済波及効果があったことを知った・食・温泉など恵まれた霧島に住んでいて知らなかったことが多かったです。霧島でたくさん体験し楽しんでいこうと思いました。
- ・温泉ムービーがおもしろかった。霧島のことがよくわかりました。

第2回『昔と今、そして未来～人口減少とデジタル時代を生き抜く知恵～』

- ・デジタルに弱いので不安がありましたがデジタルも進化しているのでこれから使いやすくなるとのことで少し安心しました。また仕事柄、電子マネーやアプリの説明などする機会があるのでこれから役に立てばと思いました。
- ・人口減少、高齢化社会のグラフを見て、将来が怖くなった。うまくデジタルを使って、平和な未来を暮らしたいと思った。
- ・新たな視点を持つ機会になった。チャット GPT にトライしようと思ったが、デジタルは上手く活用しつつ、最終は自分で考えて、判断し、自己責任のもとに人生を歩んでいきたいと改めて思った。
- ・スマホで統計は斬新。

第3回『古代文学における「隼人」～デジタル時代と文献学～』

- ・古代文学が DX で身近に確認できるようになった事を知りました。隼人が昔は賊であったと聞いていたが文献では確かに記載されているなど感じました。
- ・古事記について基礎知識がなく、難しく思いましたが、専門に研究されている方の話を聞ける機会はそうそうないし、「隼人」という名称・民族?!について、いろんな文献を駆使し(古い書物もデータで見られる!!)、いろんな視点から、深掘りできるのだと知り、研究者ってすごいなあ、と思いました。蓄積してきた知識と学び方をお裾分けしてもらい、ありがたく思います。
- ・国生み神話の所は、本を以前よんだことがあったので、興味深かったです。大まかにでも隼人のことをしれてよかったなと思いました。
- ・文献学という講座を始めて聴講しました。とてもおもしろく聴くことができました。

第4回『地域の防災意識と災害伝承～石碑の利用とデジタル活用～』

- ・地理院地図で災害石碑を確認出来る事を知りました。国分海岸でも桜島噴火の影響があった事は知りませんでした。昔の石碑情報は大事だと知り、これはデジタル化が更に大事だと思いました。
- ・災害伝承と石碑のことは、とても大事なことだということがわかりました。異変が起こる前兆も地域に住む人々の日常の生活を体感していくことは、とても大切だと思いました。
- ・防災の意識(居住地だけでなく、通学、通勤地、観光地も含め)を高めること、後世に伝えていくことの大切さに改めて気づかされました。石碑は時々、読んでみますが、なかなかです。ひかり拓本は面白そうです。
- ・神社巡りが趣味で県内は、ほぼほぼ参拝しましたが石碑をスルーしたり、気づいても昔の仮名漢字で書いてあったり、古くて擦れて読めなかったりでやり過ごしていました。今回アプリがあると聞いたので検索して巡ってみたいと思います。

第5回『足元から歴史を照らす～奄美・与論島の事例から～』

- ・歴史を学ぶ中で、民俗学にも興味が湧いてきていたのは何故なんだろうと思っていたところ、民俗学の魅力の一つが【感情を扱う】という話しに納得できた。ただ民俗学の本は読みにくさも感じているが、根気よく読み進めていきたいと改めて思えました。
- ・与論の民族興味深く、拝聴できありがとうございました。民族学より現在過去未来の対比、現在も考慮深く拝聴できました。
- ・まず民族学という内容を知らなかったのが、今回の講座は良い機会となりました。民族資料の三つの分類が今後の参考となります。今のうちに昔からの風習、しきたりを聞きとってデジタル化していく必要があると思いました。
- ・なにげなく行っている事に過去と繋がっている事であったり未来に繋がったりしているのは興味深い。

第6回『霧島市の未指定文化財の魅力』

- ・『「人の営み」とともに』の視点が改めて新鮮でした。歴史や食、祭りなど全てに通じていまね。個人的には『小麓』がとても興味深いでした。
- ・三体堂などあちこち行ったことがあり、立派な武家屋敷的な物があると感じていましたが、今日、繋がりが良かったです。
- ・麓、田の神、記念碑など色々見て回りましたが今回のような未指定文化と言う立場から身近なものに目を向けていきたい
- ・鹿児島島の江戸時代からの文化の深さを再認識いたしました

★受講して～受講者アンケートより抜粋～

第7回『外からみるとよく見えた、霧島の歴史的潜在力』

- ・自身のデジタル知識？対応？への遅れ、勉強不足に苦悩していましたが本日の講義を受ける中で全体的(アナログ)視点を忘れデジタル的視点からの見方、考え方が先行しすぎの部分を大反省しています。
- ・見方を変える事で新たな事が見えて来る事を改めて感じた次第です。
- ・今回の講義の中で自分の中に眠っている「生きる」ということを強く考えさせられて受講してよかったと思いました。
- ・話しの内容が、体験されたりリアル感があり、共感することが多く参考になりました。

第8回『南の縄文ストーリー ～あなたがいたから今がある～』

- ・いつかはまた来る始良カルデラ、鬼界カルデラ大爆発に関し壊滅的な消滅を思うと、今この時のなんとも言えない愛おしさを感じました。
- ・人の活動は当然ですが、地球の活動と深く関係していることを改めて認識し、厳しい変化の中を工夫しながら命を繋いできた祖先達に感謝ですね。
- ・分かりやすく面白く聴講することができました。人間の色々工夫してきた生活も伝わってきました。「まつり」「いのり」を通して集団の繋がりを大事にしてきたということも伝わってきました。「引き継がれる命とともに成功と失敗の歴史→未来へのヒント」の言葉を心にとどめたいと思います。
- ・素晴らしい内容でした。資料もすごい内容で参考にいたします。

写真で見るニューライフカレッジ霧島

開講式：志學館大学社会連携センター
淵脇生涯学習部門長

第1回：坂元 祐己 氏



第2回：白尾 克己 氏

第3回：田中 智樹 氏



第4回：宗 建郎 氏

第5回：町 泰樹 氏



第6回:東川 隆太郎 氏



第7回:中堀 清哲 氏



第8回:前迫 亮一 氏



受講風景(鹿高専会場・第5回より)



閉講式：鹿児島工業高等専門学校
島名地域共同テクノセンター長



開講式・閉講式：霧島市教育委員会
池田教育長



令和7年度 ニューライフカレッジ霧島「隼人学」要旨集録

令和8年3月 印刷／発行
発行／編集 令和7年度 ニューライフカレッジ霧島

志學館大学事務局
(社会連携センター生涯学習部門)

〒890-8504
鹿児島県鹿児島市紫原1丁目5-9-1
TEL 099(812)8501
FAX 099(257)0308
E-mail life@shigakukan.ac.jp

独立行政法人国立高等専門学校機構
鹿児島工業高等専門学校事務局
(地域共同テクノセンター)

〒899-5193
霧島市隼人町真孝1-4-60-1
TEL 0995(42)9038
FAX 0995(43)4271
E-mail kikaku@kagoshima-ct.ac.jp

霧島市教育委員会事務局
(社会教育課)

〒899-4394
霧島市国分中央三丁目45番1号
TEL 0995(64)0708
FAX 0995(64)0731
E-mail gakyusu@city-kirishima.jp